

AV JOURNAL

1984年9月 第6号



<5階新L.L.教室にて>

目次

視聴覚教材の開発について.....	吉田弥寿夫.....	2
1984年度L.L.授業時間割表)	3
テープライブラリー・L.L.自習室の利用案内		
同時に訳すための要点.....	船山 仲他.....	4
同時通訳講座を受講して.....	小嶋早百合.....	10
思いつくままに.....	杉本 孝司.....	11
5-II 新L.L.教室について.....		13
<出版物案内>.....		15
編集後記.....		16

視聴覚教材の開発について

留学生別科 吉田 弥寿夫

夏祭りや縁日の夜店などで、石板と蠟石を買ってもらったことがあった。これを風呂敷に包んで、ノートがわりに学校へもっていったんだという母は、遠くを見つめるような深い瞳をしていた。今日では、そんなものを筆記用具として使っている学生はないだろう。ところが、語学教育において、これに近い状況がわれわれの周辺には根づよく残っているのではないだろうか。昔気質を売り物に、蛮声と鞭で学生をシゴキあげ、教師としての使命感に陶醉しているような、授業風景は、わが学園に皆無であろうか。実は、これは筆者の戯画化した自画像であるが、こんなアナクロニズムは、筆者の学生時代には随所に見られた。それというのも、語学系の先生はだいたいは文科系の出身者で、文科系は機械オンチと昔から相場がきまっていたからである。

しかし、このごろの若い人々は文科系といえどもメカに強く、とりわけ戦後は、外国語学習志望者が、かならずしも文科型の人間とはかぎらなくなって、機械アレルギー症がだいぶ減ったようである。

外国からのお客さまを案内して、学内見学をする機会が多い。本学で外来者に誇りうる設備は図書館や視聴覚施設ぐらいであろう。

わたくしたちが若いころ学んでいたのとは、まさに隔世の感がある。音と映像から発音が矯正され、他人の前で恥をかかされることなく、心ゆくまで練習することができる。もし学生時代にこんな装置があれば、もうすこし外国語が好きになっていただろうとうらやまれる。スズメのガッコよろしく、外人教師の発音を、“all together”の号令一下、全学生がくりかえすなんて図は、生意気ざかりの年ごろには、羞恥の感情なしには、とうていがまんできるものではなかった。“He will come soon”と友達にいつてもらって、たいていは芝生でねころんでいるか、日本橋の天牛書店へ並びにいったものだ。当時は古本を買うにも店頭に行列しなければならなかった。

ところが、この間フランス語のL.L.クラスを見学

させてもらった。各ブースのテレビにうつる画面とともに、自然な日本語の会話——関西生まれの筆者のような上方訛りのない——がながれ、続いてフランス語がきこえてくる。これでは上達するはずである。留学生別科の日本語学習は15週間のインテンシブコースだと誇っていたが、学習開始後、1月半もたたない1年生のクラスである程度の会話学習がおこなわれているとは、まさに感嘆と驚異であった。そんな教材を開発されたフランス語科の先生方の御努力には脱帽のほかはない。われわれ留学生別科でも、もっと効果的な教材を作成しなければと、ネイティブスピーカーにことかかない言語だけに恥ずかしいかぎりであった。

外国人に日本文化史を講義していて、日本民族はmono-race, mono-languageではない。伊勢神宮と出雲大社では建築様式がちがう。一方は「妻入り」、他方は「平入り」あるいは「母屋入り」だといっても、なかなか分かってもらえない。伊勢神宮や出雲大社の写真集や絵はがきも、この点をはっきり写しているのは手に入りにくい。また芸能史の講義でも声色や口三味線の下手クソな実演入りの授業より、ビデオがあれば簡単である。この種の教材もぜひ開発したい。

ことを語学にかぎってみても、横浜のアメリカ領事館附属日本語学校できかされたテープには、わざとノイズが入れてあった。学習者が実際にでくわす言語環境は、密閉されたブースの中のようなものではない。hearing powerを強化するためには、悪条件のもとできく習慣をつけなければならないということであった。最初は理想的な状況で発音をききわけ、だんだん擬音を入れて、自然環境のような雑音入りのテープを作ってゆけば、学習者の実戦力をつけるのに役立つであろう。また、日本語独特の位層差の問題、とくに待遇表現の学習には、あるシュチエーションのもとで、男女いく人かの階級差のある人物を登場させ、「たべる」「くる」「いる」などの

相手によって表現をかえなければならない動詞の、
練習用ビデオテープを作ってみてはどうか。夢は際

限なく広がってゆくのである。

(1984. 6. 30)

1984年度 LL授業時間割表

	教室	I	II	III	IV	V	1	2
		9:10~10:40	10:50~12:20	13:10~14:40	14:50~16:20	16:30~18:00	18:20~19:40	19:50~21:10
月 MON	4-I	It1 マッラ	R2 小川	R1A 生田	R1B 生田	C1B 青野	R 生田	E 杉本
	4-II		P ナラギー	Dm3・4 福居	D院 乙政		F 小沢	C 上神
	5-I		It2 マッラ	S1 アルバレス	S アルバレス			
	5-II	F2 ボロー	F1 ボロー	B3・4 エーベ		R3,4 桜井	E パーウィック	E パーウィック
	V.R.	H2 溝上	K4 金	K1,2 金				
火 TUE	4-I		E2A スターク	E2B スターク				
	4-II	U1 タバッサム		M2 荒井				
	5-I	B1 南田	B2 南田	E1A 舟坂	F1 大木			
	5-II			K2 奥田	F ボロー	F4 ボロー		
	V.R.				K3 金			
水 WED	4-I		V1 富田	C3,4 杉村				D 友田
	4-II		IN1 松野					S 伊藤
	5-I	E1B 舟坂	S アルバレス	S アルバレス	It 郡	It 郡	It 郡	E 上野
	5-II		It 郡			It 郡		
	V.R.					美林		
木 THU	4-I	A3,4 イサム				C1A 中山		
	4-II	K1 李	H1 マーラヴィア		In アイブ	In アイブ	E 渡辺	
	5-I	E 斎藤						
	5-II		B3,4 エーベ					
	V.R.		V 富田	K4 金				
金 FRI	4-I	D2 乙政	E3 舟山	C2A 上神	C2B 上神	F2 小西	E ドランス	E ドランス
	4-II	PB2 河野	PB1 東	D1 友田	Ph1 津田		E 杉本	D 野村
	5-I		E 斉藤					F 小西
	5-II	F2 ボロー	F1 ボロー		V1 富田	Ph 津田		
	V.R.							

テープライブラリー・LL自習室の利用案内

図書館棟4・5階、視聴覚教育施設には、教職員・学生利用のために、テープ・ライブラリー24席、LL自習室17席(25名)が設けてあります。テープ・ライブラリーには約18,000本の録音カセットテープと600本のビデオテープがあり利用者は目録等で検索し、貸出しテープを受付で請求して下さい。利用方法は下記のとおりです。

1. 利用時間 月水金 9:30~7:45
火木 9:30~4:45
2. 貸出について ○カセット・テープ・ビデオ

テープの貸出しは1回1本ずつ。

○施設外へのテープ・テキストの貸出しは一切、許可しない。

3. 室内において、飲食、喫煙その他室内を汚す行為等は厳禁。
4. テープのダビングは著作権法上一切禁止する。
5. その他施設利用、機器使用については視聴覚資料係まで。

同時に訳するための要点

英語学科非常勤講師 船山 伸 他

はじめに

二カ国語間の変換作業にはいろいろな様式がある。紙の上に文字を使って書き記す翻訳、音声を使って訳を伝える通訳、そして、その通訳にも、原発言者と通訳者が交互に喋る逐次通訳と、機械装置を使って訳を同時に流す同時通訳とがある。

翻訳にせよ通訳にせよ、そこには当然共通する側面があり、翻訳論や日英語対照研究というような分野としていろいろな研究がすでになされている。そこで、ここでは、同時通訳に焦点を合わせて、それらの研究からはみ出す部分を扱ってみたい。すなわち、同時通訳特有の側面に注目し、単に訳すだけではなく、同時に訳すためにはどのようなことに注意しなければならないかを整理してみたい。

同時通訳の最大の特徴は、聞きながら喋らなければならないという点である。原発言とほぼ同じ時間しか使えないという時間的制約も大きな課題であるが、やはり、同時に喋ることの方が大問題だ。言語活動として非日常的である。

そもそも、聞きながら話すことは人間の脳にとって可能なことであろうか——そう問うことは極めて妥当であり、かつ本質的であると思う。結論を言えば、「そこに意味内容の一致があれば可能である」ということになる。すなわち、自分が話そうとする意味内容が、自分自身のイニシャティヴで湧き出てくるのではなく、耳元から流れる他人のイニシャティヴで流れてくるという状況を考えればよい。したがって、「聞きながら話す」というよりも、「話しながら聞く」作業であると言うべきかもしれない。意味内容という点で通訳者は受け身であるが、通訳行為という点ではあくまでも通訳者は話し手なのであり、意味内容のインプットが発話行為を阻害しない限り、通訳者は話し続けることができるのである。

いま述べたことが原理である。同時通訳は原理的に可能なのである。そして、その本質は意味内容を追う点にある。決して表現を追うのではない。

しかしながら、このように原理的に可能だからといって、実際にも容易にできるということにはならない。実際面では技術、技巧も必要である。話の背景にある知識も必要である。度胸も必要である。そこで、ここでは具体例に基づき、実際にはどのようなプロセスで同時通訳がなされるのかを訳し方の観点から紹介し、その実際面の一端を見ていただくことにする。言うまでもなく、音のバランス（インプットとアウトプット）やヒアリングの問題など、紙上では論じ難い側面には目をつぶることになる。

実 例

原発言の例として次のような英文を使ってみよう。これは、マンスフィールド駐日米国大使に国弘正雄氏がインタビューしたものの一部で、本学の同時通訳演習の授業で使用した教材でもある。

KUNIHIRO: Do you think the Americans can be liberated from the perfectly understandable shackle of the European-centeredness? Do you think the Americans will be able to direct their attention more to the Asia-Pacific region?

MANSFIELD: I think the answer is "yes." I think they're moving in this direction. And since the United States became an independent nation, the push has always been westward across the Continent, across the Pacific. The pull has always been eastward across the Atlantic where most of our people came from.

これを、同時通訳を意識せずに日本語に訳すと、次のようになるだろう。

国弘：アメリカ人のヨーロッパを中心とする考え方——これは私たちからみてもわからないわけじゃありませんが、しかしひとつの束縛された観念を形成しています——からアメリカはみずからを解き放つことができ、そしてその関心をアジア・太平洋地域に向けることが可能だとお考えですか。

マンスフィールド：その答は「イエス」だと思います。アメリカ国民の目はすでにこれらの地域に向き始めています。アメリカは独立以来一貫して、そのエネルギーを北米大陸の東から西へ、西海岸からさらに太平洋を越えて、といった具合に西方向へ向けて放出し、一方で父祖の地であるヨーロッパにひかれてきました。

(グロービュー社『Turning Point』を参考)

同時通訳的訳

同時通訳においてどれだけの言葉数が使えるかは、原発言者の話すスピードと通訳者の口のまわりの良さで決まってくるので、ある程度の幅がある。しかし、標準的な場合を想定すれば、上記の訳では、まず時間が足らなくなるだろう。

しかし、上記のような訳を同時通訳では出し難いもっと大きな理由の一つは、人間の記憶力の限界にある。すなわち、簡単な例をとると、Do you think…と聞いてから、「…とお考えですか」と訳すまでその

情報を頭の中に蓄えておくのは大変である。なぜならば、その間に30程の単語が流れてきて、それぞれの処理をしなければならず、その処理をしながらの記憶であるからである。

そこで、できるだけ頭から次々に訳していく工夫も必要となる。その基盤となるのは、意味内容、情報の単位である。一連の話を最小の情報単位毎に処理していくようにするのである。一応の目安として、文の成分を最少単位と考えればいいだろう。〈例a〉ではそれを斜線で区切り、各々の情報単位に番号をつけておいた。

さらに、〈例a〉には同時通訳的な頭ごなしの訳をつけてある。時間軸上を流れる原発言を追いかけるように出していく日本語訳を各行に平行させて記してある。英語と日本語の位置関係は訳を出すタイミングを示すことになる。後で検討するように、〈例a〉は決して理想的な同時通訳ではなく、その基礎を成すだけである。

〈例a〉

KUNIHRO : / (1) Do you think / (2) the Americans / (3) can be liberated /
 / (1) あなたのお考えでは / (2) アメリカ人は
 (4) from the perfectly understandable shackle / (5) of the European-centeredness?
 / (4) 全くうなずける足かせ
 // (6) Do you think / (7) the Americans / (8) will be able
 / (5) (即ち)ヨーロッパ中心主義という足かせから / (3) 解放され得るものでしょうか。 // (6) あなたのお考えでは
 to direct / (9) their attention / (10) more / (11) to the Asia-Pacific region? //
 / (7) アメリカ人は / (9) その関心を / (10) もっと
 MANSFIELD : / (12) I think / (13) the answer is "yes." // (14) I think /
 / (11) アジア・太平洋地域に / (8) 向けることができますでしょうか。 // (12) 私の考えでは / (13) 答はイエスです。
 (15) they're moving / (16) in this direction. // (17) And / (18) since /
 // (14) 私の考えでは / (15) アメリカ人は / (16) その方向に / (15') 動いています。
 (19) the United States / (20) became / (21) an independent nation, / (22) the
 // (17) そして / (19) 合衆国が / (21) 独立国に
 push / (23) has always been westward / (24) across the Continent, / (25) across
 / (20) なって / (18) 以来 / (22) 推進力は / (23) 常に西向きです。 / (24) (つまり)大陸を横切り、
 the Pacific. // (26) The pull / (27) has always been eastward / (28) across
 / (25) 太平洋を横切る(方向です)。 / (26) 引きつける力は / (27) 常に東向きで、
 the Atlantic / (29) where / (30) most of our people / (31) came from.
 / (29) 大西洋を横切る(方向です)。 / (29) それは / (30) アメリカ人の多くが / (31) 来た(方向ですね)。

〈例a〉の英文と日本語を比べると、多少不自然な日本語があるにせよ、情報単位の出る順番をできる

だけ一致させようとしていることに気づかれるであろう。入手した情報をできるだけ早く訳出してしま

push / (23) has always been westward / (24) across the Continent, / (25) across
 / (22) 推進力は / (23) 常に西向きで、 / (24) 大陸を横切り、
 the Pacific. // (26) The pull / (27) has always been eastward / (28) across
 / (25) 太平洋を横切る方向です。 / (26) (逆に)引きつける力は
 the Atlantic / (29) where / (30) most of our people / (31) came from.
 / (28) 大西洋を横切って東の方、 / (29)(30) (つまり)多くのアメリカ人の出身地を向いています。

冒頭の(1) Do you think は〈例 a〉と同じく「あなたのお考えでは」と訳してあるが、この言い方はあまり自然ではない。「思います」という雰囲気や文末に残しておけばそれで十分であろう。そこで、〈例 b〉では、(6)、(12)、(14)は全て省略してある。実際の発話には冗長な部分が多い。「手直し」ではそのような部分で時間の損失を取り戻すのである。だから、その必要のない(1)だけは、やはり「あなたのお考えでは」と、むしろ、時間稼ぎのためにも長たらしく日本語に訳してある。

情報単位の一部を分割して後回しにした方がよい場合がある。(15)はもともと主語と動詞句をまとめてあるので、日本語では(15)と(15)のように分かれざるを得ない。これはむしろ情報単位の切り方の問題である。しかし、(23)や(27)は、その一部分、すなわち、「…に向いている」という意味を、その場で処理するよりも、少し保持しておきたい。また、(4)の perfectly understandable と shackle は分割した方が訳し易い。この(4)の部分は英語と日本語の違いの一つを浮かび上がらせる。すなわち、動詞派生の形容語句は日本語の話し言葉では少ないが、英語では極く普通である。したがってそのような表現を日本語に訳す場合には、別立ての文にしてしまった方がよいだろう——特に、(4)のように更に副詞がついている場合は。

「手直し」が最も有効に働くのは、情報単位の再合成である。〈例 b〉では、(21)(20)(18)、(29)(30)がその例である。時間の節約にもなり、かつわかり易い訳文が出せるこの作業がいかに行なえるかが通訳者の力量にかかっていると言ってもよいだろう。

全体的に、〈例 b〉では〈例 a〉と比べて情報単位毎の訳出のタイミングがよりまちまちであることに気がついていただけるだろう。そして、それが結局は、より一様な訳出につながっている。一方では原発言の冗長さや、ここでは触れなかったイントネーション上の合図を利用し、他方では情報単位の入れ換えや再合成を効果的に活用することによって訳出のタイミングに柔軟性を与え、全体としてなめらか

でわかり易い日本語を出すのが目標なのである。

まとめ

実際に同時通訳をステレオ録音してみると、〈例 b〉に見られるようなタイミングから大幅にずれることは珍しくない。一文や二文遅れぐらいはむしろ普通である。しかし、他方、〈例 b〉よりももっと早いタイミングでの情報の取り入れもある。

どの辺りをじっくり訳し、どの辺りを早く処理するかは判断は、結局のところ、経験に基づく直感でやっているようである。この小論は、そのような直感の基礎となると思われる要点を理性的に整理したものと言えよう。

〈資料〉

受講生の反応

同時通訳演習の講座も3年目を迎えた。昭和57、58年度には、それぞれ、29名、17名の学生が単位を取得した。各年度末にアンケートを実施しているので、ここで、両年度の結果を紹介することにする。

アンケートの設問は次の5項目で、無記名、記述式である。

1. 一年前(この授業を取る前)に比べ、同時通訳についてのイメージは変わりましたか。
2. 授業の中で最も印象に残っている練習(あるいは話)は何ですか。
3. 自分に最も欠けている力は何だと思いますか。
4. 授業にもっと組み込んで欲しかったと思うことがありますか。
5. その他、気がついたこと、希望、自分の反省等何でも書いて下さい。

設問1に対して、親しみ、実感がもてるようになったことを指摘したものが、57年度では29名中12名、

58年度では17名中7名(以下、12/29、7/17と略記する)であった。難しさがよくわかったという趣旨のことを答えた学生は13/29、7/17であった。文章による答であるから、共通する意見を数え上げることは難しいが、他にこれだけの数にのぼる共通項はなく、上記の二点がはっきりと目立った。したがって、親しみがもてるようになった反面、難しさも感じるようになった、というのが中心的な反応であると言えるだろう。答え方は違って、たとえば次のような解答も同系の印象と考えてよいだろう:「イメージが変わったというより、同時通訳というものがどういうものか、ということが、実感としてとらえることができました」

自分自身が同時通訳者になれそうかどうかという点に関しては、「自分には到底むり」、「自分には同時通訳をする能力及び適正は皆無である」、「今は恐怖感に近いものすら感じます」など、悲観的な答が圧倒的に多かった。担当講師としては、難しさをわかってくれたことはそれだけ理解が深まったことなのだと同向きに捉えたい反面、もっと果敢に頑張りたいという気もするし、また逆に、いきなり同時通訳を目指すのは飛躍し過ぎだろうかと思ったりする。しかし、「本当に同時通訳者を養成するならば、極く少数を高度に教育すべきものだと思うようになりました。けれど、私のような学生でも、現在から簡単な通訳をたのまれることもあり、何らかの形で役立っていることは確かです」という肯定的な意見もあり、当面、今の方向でいだろうと思っている。

同時通訳に対する理解が深まったことは、「英語を聞きとる能力と同じくらい、又はそれ以上の日本語を正しく話す能力が大切であることがわかった」など、具体的な側面に言及した答が多いことから窺える。

しかし、中には変な答もあり、「同時通訳」を「同時通訳者」と解釈しての反応かと思われる次のような答もあった:「船山先生を見てると、『おお、ビジネスマン』という感じがして、イメージは変わったと思う」これは自分では全く思ってもみなかったことで、大学の先生というのは余りスーツは着ないのかなと考え直してみたり、気にすることもないだろうと思いつつも、アタッシュケースを教室に持っていくのはやめたりしている。

設問2に対する答えとして圧倒的に多いのは、ディ

ジション・ルームを使って実際に同時通訳をする練習(10/29、7/17)と、同時リピート(11/29、4/17)である。どのような練習形態をとっているかについてはAV Journalの第2号で述べてあるのでそちらを参照していただければと思うが、同時リピートというのは要するに、ヘッドフォンを使って、耳から入ってくる英語を同時に口でリピートする練習である。私自身は、速訳(原文を目で追いつながらどんどん口で訳していく練習)と同時リピートが同時通訳の練習の二本柱であり、学生にもそう言っているのだが、速訳の方はどうも人気がない。英文解釈とは要領が違うのだけれど、学生にしてみれば、英文解釈の延長としか思えないのだろうか。

ディジション・ルームの同時通訳設備は本格的なものであり、学生はブースに入るだけでも緊張するようである。強い印象が残るのも当然だと思われる。しかし、練習の効率を考えて、前期は主としてL.L.教室を使っている。この辺りの事情についてはまた別の機会に報告したい。

設問3に対してはいろいろな答があるが、トップ3は、語彙力(12/29、8/17)、ヒアリング(8/29、6/17)、同時に話し聞く力(9/29、7/17)である。訳したくても単語を知らないとどうしようもないという気持が強く出てくるようである。集中力、瞬発力の類を挙げた学生も何人かいた。訳せるはずなのに口が動かないというもどかしさを感じるのであろう。

基礎知識(3/29、2/17)、日本語の力(5/29、2/17)も日頃の練習で痛感することであろうし、また、私が強調していることでもある。しかし、その他、反射神経、内容把握など、いろいろな表現が見られるが、「最も、といわれても困る」という感じもあるようで、「土台の部分をしっかりしない限りその上へ積み重ねていくことはできない、そんな感じですよ」と述べた学生もいる。

設問の4、5は授業の具体的な反映であり、担当講師にとっては反省点である。日本語から英語への通訳練習がもっと欲しい(3/29、5/17)、実際の同時通訳をもっと聞きたい(4/29、3/17)、政治・経済以外の話題の教材がもっと欲しい(3/29、5/17)などは正しく授業の偏りを映し出している。

それぞれの点について若干申し開きをすると、次のようになる。まず、日→英の練習が少ない理由は、何とんでも、そこまでたどり着く時間がないこと

である。順序として、やはり英→日の練習から始める。そして一通りのことをすると、もう12月ぐらいになっている。とてもじっくり日→英をする時間はない。それではいけないと思って、並行的に日→英の練習を入れてみたことがあるが、いきなりすると、英→日の出方よりずっと少ない。そうすると、少し日→英の準備段階を設けた方がよいということになる。しかし、それではもう週一回の授業には収まりきれなくなってしまうのである。

実際の同時通訳を聞きたいという学生は結構多いようである。年に何回かは自分の同時通訳を録音したテープを少し流したり、ディビジョン・ルームで少しデモンストレーションしたりするが、十分ではないようである。私としては恥ずかしいという気持ちが先に立つ。これは改めねばと思っている。それでは、他の同時通訳者のものを聞かせればよいではないか、と言われるかもしれない。最近では、テレビなどでもやっているし、それを録音しておいて聞かせればよいかもしれない。実際のところ、少しはそれもやっている。しかし、それならば学生が自分でできるであろうし、それに、現場で自分がやっている限り、他人をモデルに使いたくないという変な“気位”もある。

教材の話題が政治、経済に偏っているのは通訳の現場の反映である。医学や工学などに関する国際会議も多いが、やはり、広い意味での政治、経済関係の会議、講演会、会合が多い。そして、音楽、芸術関係は少ない。しかし、教材としては現場にこだわる必要はないかもしれない。

設問5の答で目立ったのは、内容が高度過ぎる(2/29、6/17)、4年生対象のクラスも作って欲しい(1/29、4/17)というような注文である。このアンケート結果の報告の公正さを保つためには、休講が多い

(3/29、2/17)という注文があったことも記しておかねばならないだろう。しかし、最近はこの点は著しく改善されている。

内容のレベルについて私が考えていることは、少し位背伸びをしてもらう方がいいだろうということである。教える側からもう一つ言えることは、学生間の力の差が実質的であるということである。教材のレベルは上位の学生に合わせたい。

クラスを増設する問題は私の手の届かない領域にある。ただ、私にとってはやはり勇気づけられる注文である。57年度は4回生も対象に含めていたが、58年度からは3回生のみを対象にしている。そこで、4回生対象のクラスもという希望が出てきたわけである。もっとラジカルな希望として、1、2、3年生と連続して受講できるクラスを作って欲しいと言うものもあった。また、「これだけの施設が外大にあるのに、このクラスだけが使うというのは、大変もったいないことだと思います」というコメントには私も全く同感である。

学生側の反省としては、やる気はあるのだけれどもつついさばり勝ちであった、というのが多いようだった。「やはり最初はもう少し簡単な教材にするわけにはいかないでしょうか」と言いながら、「雑誌や新聞を読むという自分自身の努力が全くたりませんでした」と反省している学生もその一人だ。

最後に、ちょっとおかしなコメントを紹介して、この報告を閉じることにする。「自分は決して同時通訳者には向いてはいませんが、普通の会話やヒアリングの能力向上には役立ったと思います。それに、同時通訳の雰囲気や少し味わえてよかったです。しかし何と言っても、周囲の人々に『オレは同時通訳のコースを一年間やったんだゾ!』といばれるのが楽しみです。」



〈スタジオでの
ビデオ撮影〉

同時通訳講座を受講して

E 4 B 小 嶋 早百合

「いいですか。じゃあ始めます。」という声と共に両耳のイヤホンから滑らかな英語が流れた。目の前のガラス越しにブースを見上げる、好奇心に満ちた同級生の顔。それがどうしたものか。聴こえてくるのはお馴染みの英語なのに、何を言っているのか理解できなくなってしまった。次から次へと洪水の様に押し寄せる音にただ耳を傾け、私はしばらく唇を動かすことさえできない。ようやく初めのショックから回復した時には、テープが終っていた。「はい、交代です。ご苦労さま」

今日、同時通訳は私達の日常生活にすっかり根を下ろしたようだ。テレビのニュース、インタビュー等で一日一度は無意識のうちに接していることだろう。私が初めて同時通訳の存在を知ったのは高校二年であった。それ以来その響きに対する憧れを強める一方、同時通訳が果して何であるのかは、まったく無知のままであった。

幸運にも三年で同時通訳の授業を受けることになり、プロが「拷問室」と呼ぶというブース初体験の顛末が冒頭に記した通りの惨たんたるものであった。しかも、交代した友達が皆、なんとかポツリポツリと訳す声を聴くに及んで、私は完全に叩きのめされたような気持ちになった。私など及びもつかない世界ではないかと夢が崩れていったのだ。

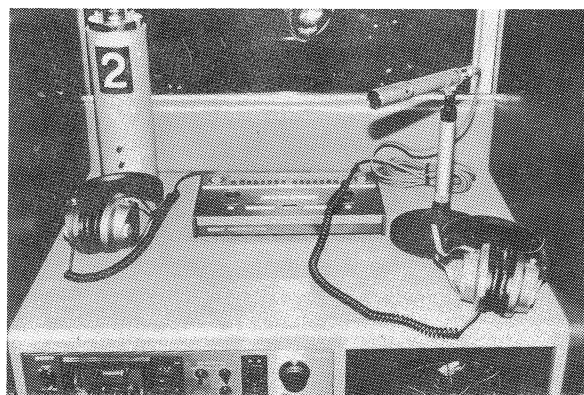
それから一ヵ月、半年。相変わらずブースでは両手に汗をかき緊張の連続だったが、いつかその緊張を楽しんでいる自分を発見して少なからず驚いた。文法も発音も全く異なる日英二つの言語を自由自在に操ることの難しさが、授業が進むにつれ明らかになる。と、今まで意識したことのない自分の日本語の貧しさを強烈に感じるようになった。

通訳は一つ一つの言葉を単に別の言葉に置換える単純作業ではなかった。何気ない一文にも、発話者の意図にできる限り忠実になって聴き手にわかるように伝えるには、実に種々なプロセスがある。英語がいくら美しく話せても幅広い知識が基礎になけれ

ば、話者の持つ概念は聴衆に理解されない。通訳の分野に機械が現われた今、人間の通訳には、より複雑かつ困難なものが求められるようになっているのではないだろうか。

週一度一年間の授業では、同時通訳の入口を垣間見るに過ぎない。しかしこの世界に興味を持つ者に或る程度の指針を与えてくれる。また、職業として同時通訳を選ぶか否かにかかわらず、授業を通して得るものは大きい。英語に麻痺した日常から抜け出し、改めて日本語と英語の違い、その後ろにある発想や思考の差、更には英語を学ぶことの意味など、実に考えるところが多かった。

四年になり、授業であるブースに入れないことを寂しく思う今日この頃。機会があれば、あのとてつもない緊張感と、「今度こそ。」という希望で胸を一杯にして、再びマイクに向いたい。初めて同時通訳に触れて一年余り。いつの間にか私は同時通訳に魅せられ、今度は憧れではなく、一足一足夢に近づきたいと思っている。



〈同時通訳室〉

思いつくままに

英語学科 杉本孝司

同僚の大橋先生が香港大学へ出張されたのがこの3月。今頃、熱い香港で日本語・日本文化の教鞭をとっておられることでしょう。この大橋先生の離日に付随して、実は私に大変な事件が起りました。II部英語科代表視聴覚委員、という役まわりが、やって来たのです。あのL.L.委員というヤツです。

「小委員にさえ選出されなければ暇ですから……」
「ああそうですか。じゃあ、なんとかやってみましょう」

てな簡単な気持で引受けたのですが……。一ヶ月もたたないある日のコト、

「杉本さん、L.L.小委員に選ばれましたよ！」

図書館前、突然の出会い頭に、大木先生から一声飛んで来ました。

ガーン！ ガ・ガーン！

まさか、と思っていた小委員！（しかも筆者不在のもとで！）これにて、それまで享（狂？）楽してきた2年間にわたる「無所属・無委員」の夢のパラダイスの終焉と相成りました。夢の様な、いえ、悪夢の様な話です。（悪い時には悪いことが重なるもので、後日、職員の所属変更から、教務委員をも、次点繰り上げとかで、おうせつかったのであります。アリガタキカナ!?）この経過が無ければ、AVジャーナルで、私の稚拙な文章で皆さんのお目を煩わすこともなかったろうに、と悔まれます。ウヘラヘミヘマヘスヘル~~~~。

「何か肩のこらない程度で教育的なことを」と言わずと知れたL.L.のKさんからの依頼を受けてはや2ヶ月。切もすでに過ぎ、筆者もがぜん焦り出し、やっと愛用のビッグ・ボールペンを取った次第です。（大ゲサに書きましたが、つまり、ポイ・ステの透明プラスチックの、例のあのタイプのボールペンです…但し Made in USA です！… というのも最近はやりませんが。）外国語に関しては、筆者は、もっぱら英語畑の人間ですから、当然のことながら、英語に関

することしか書けません。それも、たいていは、英語学とか言語学といったシュール・リアリズムの世界にいる訳で、そこから、この話も始まる訳です。最近の理論言語学の論文には必ずと言っていいほど、出現してくる記号があります——*と?です。例えば、

- a. *He likes those pictures of John best.
- b. *He likes the pictures that John saw best.
- c. ? Which picture of John did he like best.
- d. Which picture that John saw did he like best.

今、下線部の he と John が、それぞれ同一人物を指示する場合に限れば、a, bは文法的でない非文(*)、cは疑わしい・分からない(?)、dは文法的な文、といった具合に、Native Speakers(母国語話者)の文法性の判断を表すのに使用されます。この種の判断には、全く問題の無い場合もあれば、必ずしもそうとは言いきれない様なものもあり、悩まされる訳です。（極端な場合、**、*、???, ??, ?という風に、我々日本人が見たらゾットしそうな文法性の判断に運悪く遭遇することもあります。）「そんなものは、無視しろ！」の一言で片付けてしまえば、気楽に人生が過せるのではないか、と思うのですが、個人的にはこの種の判断には、ある程度神経質になるよう努力したい訳です。自分の英語に対するセンスが試されている様であって、「フムフム、ナルホド！」と誇らしく思うもよし、「アレー、ホントカナ」とガックリくるのも、またいいものです。とにかく、英語の構文上の特徴を否が応でも、意識せざるを得ないこと請け合いです。そこで提案ですが、どれでもいいですから、少しましな英語学の論文の例文に接する様に心がけてはどうでしょう。そして、自分の判断と*や?がどれだけ一致するか較べてみるわけです。かなり高級な(?)暇つぶしになると思いますが……。 (但し自分の judgment がズレているからといって、悲嘆にくれることもありません。Native

Speakers だって ユ レ テ イ ル コ ト ガ ア ル ン デ ス カ ラ
——と気楽な気持ちでやり過ぎますと、あまり為にも
ならない暇つぶしに終る可能性もありますので一言。)手始めに、こんなのはどうでしょう。

- a. * There arrived some people very sick.
- b. ? How many people sick were there ?
- c. * There are most students in the room.

どれも、簡単な中学程度の“there is”構文ですが…。

さて、話が半分、L.L.とは関係のない方向に行っ
てしまいそうですので、ここで軌道修正が必要の
ようです。AVジャーナル用のエッセイとしては、何
か音声に関して書く必要があるのでは、と自問自答
しているわけです。そこで、先づ発音に関して、今、
上で書いたような*や?を持ち込むべきかどうか、
と無理矢理、話を関連させて続けることにします。
よくいるでしょう、こんな人が——つまり、英語の
発音はこうあるべきだ、と固く信じているような人
が。確かに、米国式発音とかイギリス式発音とかい
った規準が無いわけではありません。でもその実際
の中身は、種々雑多、千差万別、方言や個人差も含
めれば、無限のバラエティーがあるとも言えます。
(もちろん、学問上は「無限のバラエティー」といっ
たエントロピー的無責任発言は許されないのです
が、そこはそれ、自己撞着の許されるエッセイの世
界、どうか御容赦を。)こういった心象は、海外に出
てみれば、もっと強く抱くことができます。そうい
う私も、大した海外経験はなく、長期・短期含めて
海外経験はのべ約4年、国にして、米・加・香・韓・
台・シンガポール(最後の漢字は、よく知りません)
しかないわけですが、本当に発音はまぢまぢだと思
ったものです。「トコロ変われば発音変わる」で、そ
の国なりの、その地方なりの、その人なりの発音で
英語が立派に通用している次第です。また印象だけ
で話させて頂けるなら、英語での相互理解には、構
文がしっかりしていることが一番大切で、発音はほ
んど問題にならない、ということです。(誤解され
ると困りますが、もちろん、天気や時間や趣味とい
った、つまらない内容、というか中身の無い話をす
る時のことを頭に浮べて話しているのではありませ
ん。この程度のことでもって英会話と考えているよ
うでは、大学生失格でしょう。)とにかく、しっかり
した構文で順序よく話せば Verbal Communication

は基本的には成立するものです。そこで、第二の提
案ですが、自分の発音に関する限り、あまり*や?
を意識するな、ということです。かえってローカル
色豊かな発音もよいものです。(「それも程度問題だ
ー!」と誰かから叱られそうですが、「おさえて、お
さえて、たかがエッセイですから……」とある著名
なプロ野球選手のように逃げたいわけです。)「それ
では、何の為のL.L.授業か?」とL.L.無用論になり
かねませんが、それが実は、そうではないのです。
つまり、今までは、我々を Speaker の立場において、
Hearer として理想的な英語のよくわかる人、を考
えていたわけです。ところが、一旦、自分達を Hearer
の立場に置くとうどうでしょう。皆さん経験ありませ
んか。次から次へと耳の中に入ってくる音声の連続
が洪水状態になり、プロセス不能になる、といった
ようなことを? つまり、いくら相手が、順序よく、
しっかりとした構文で、中身のある内容を話してく
れても、こちらの聴解力不足が原因で、話が進展し
ないような状態です。「聞き上手は、話し上手」とい
う言葉もありますが、相手の言うことが完全に理解
できる、あるいは、どの部分が理解できなかったか
わかる程度に理解できる、ということ無しに、Verbal
Communication は考えられないのです。そこで、第
三の提案ですが、L.L.は、Hearing の練習に徹しろ、
と言いたいわけです。(「そんな無責任な発言は止め
ろ!」とまた叱られそうですが、「エッセイですか
ら」) Hearing の練習といっても、夏休み・春休み
つき・週1回1時間といったデ・ラックス版では絶
対に見込みありません。常日頃の訓練が必要で、い
つも自分の Hearing 能力に較べ、一段上の、少し手
ごわい、チョットムツカシイ、テープやビデオに接
する心がけが必要でしょう。その為にも L.L.自習室
を大いに利用して頂きたいわけです。(ああ、やっと
L.L.小委員として責任ある発言が、できました!)
——とここまで書いてきて、もう紙数がオーバーし
そうだと気が付いたわけです。この種のエッセイ
によくあるパターンです。実は予定していた筋書き
は、1) 英語の構文の感覚を磨け ⇨ 2) 発音練習は
ホドホドに ⇨ 3) Hearing は熱心に ⇨ 4) 聴解能
力とは単に耳の良さではない ⇨ 5) 結局、語学は総
合力、と月並みの結論に到達したかったわけです。
結論が月並みですので、中間を全部省略してもわか
ってもらえるところが、この種のエッセイの強みで

す。と以上、手前勝手なことばかり書いてきましたが、「肩のこらない程度で教育的なことを」とのL.L.のKさんの依頼、「Kさん、これでいいですか？」

肩のこった人がいたら、A棟525まで来て下さい。1分間無料マッサージしまーす！

5-Ⅱ 新LL教室について

5階にこのたび新しい第4LL教室(5-Ⅱ)が完成し、今年度より使用が開始されました。このLL教室の概要を紹介します。

このLL教室は従来のLL教室のパターンにとられない新しい型の教室で、図の様な配置となっており、映像情報時代にマッチする様映像機器(ビデオ装置が主)を多数取入れ、単なるLL授業だけでなく、多目的に使用出来る様になっています。

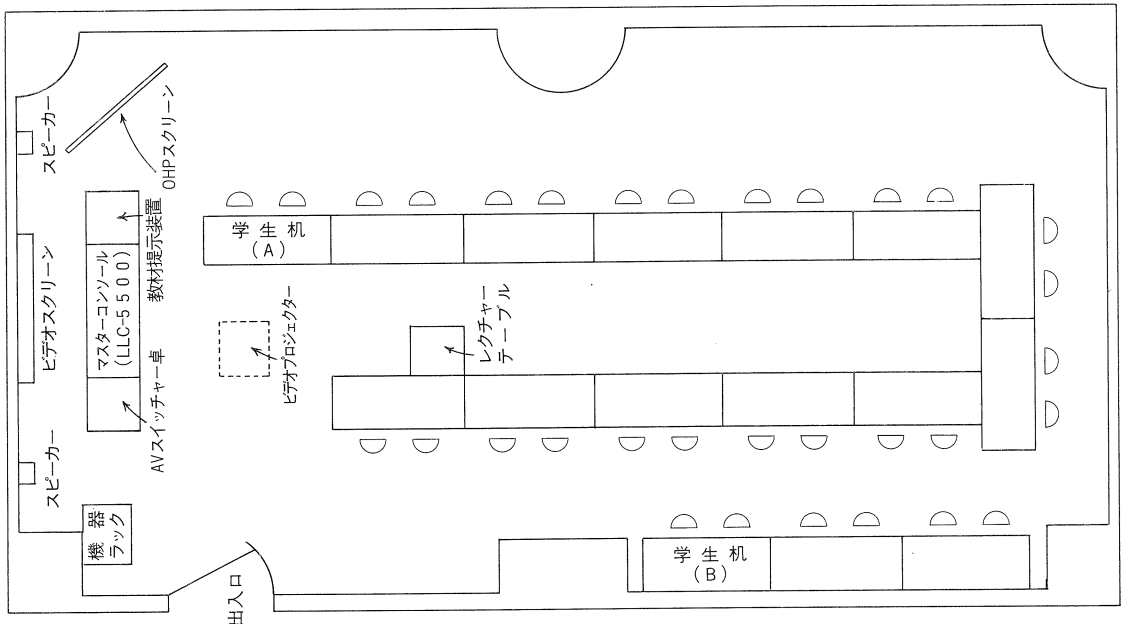
全体的特長

◎多目的利用を考慮し、従来の様なブース形式を避け、ディジョンルームの雰囲気を出す様テーブルもフラットな会議机形式とし、教壇等は撤去し教師側、学生側共、同一の高さの床面でオープンルームの形式となっています。(全体の雰囲気は写真を参照)

◎学生側には各個人別のブース用テープレコーダーはもとより、2人に1台のVTRが設置しており(ベータ方式×8台、VHS方式8台)教師側より送られる映像/音声教材を記録、再生出来る様になっています。

◎ビデオプロジェクター、OHP、スライドプロジェクターも設置されており、ビデオシアターとしても使用出来、外国映画(ビデオ化されたもの)の観賞や、OHP、スライド教材の併用授業も簡単に出来る様になっています。

◎教師、学生の距離を近づけた授業形態もとれる様、移動式レクチャーテーブルを使用、レクチャーテーブルからでもVTR、暗幕、ビデオプロジェクター等のリモートコントロールが出来る様になっています。



使用主要機器及び特長

1. LL用マスターコンソール 1台 (LLC-5500型)

主な特長

◎カラーブラウン管ディスプレイタッチスイッチ方式のため、専用ライトペンを使用せず指等で画面に触れるだけで操作が出来、かつ人間工学的にスイッチ類が配置されているので簡単に使用出来る。

◎授業中に各学生の評価が簡単に出来るエバリュエイト機能を持っている。

◎VTR教材等の映像も同一ディスプレイでモニター出来る。

◎自由自在の組合せが出来るランダムペア/グループプレッスン機能。

◎教材の必要箇所をすばやく頭出しの出来る高速サーチ機能(但しマスターテープレコーダーのみ)。

◎多様な教材テープをスピーダーに作成出来るエディティング機能。

◎ディスプレイの画面のデータを即座にハードコピー出来るプリンターを有している。

◎各学生側のテープレコーダーの集中制御が出来る。

2. AVスイッチャー卓 1台

◎暗幕の開、閉、停止が出来る。

◎マスターコンソール、ビデオプロジェクター、モニターテレビ、記録用VTRへの送り出しが自由に出来る電子式マトリックススイッチャー用コントロールパネルを有している。

◎U-matic VTR×2台、ベータ方式VTR×1台のリモートコントロールが出来る。

◎事前チェック及び送り出しチェックのためのモニターテレビ(9インチ×1台)を有している。

3. 学生用机(A) 13式 (2人用)

・ブーステレコ (ER-5050)	26台	} 学生用机に収納
・ブーステレビ (PVM-9000)	13台	
・プログラムセクター(A)	13台	
・ベータ方式VTR (SL-F3)	8台	
・VHS方式VTR (AG-2210)	5台	

4. 学生用机(B) 3式 (2人用)

・ブーステレコ (ER-5050)	6台	} 学生用机に収納
・ブーステレビ (PVM-9000)	3台	
・プログラムセクター(B)	3台	
・VHS方式VTR (AG-2210)	3台	
・U-matic VTR (VP-5000)	3台	

◎ブースレコーダーは全てマスターコンソールから集中制御が出来る。

◎ブースレコーダーにはワンセンテンスリピート機能がついている。

◎プログラムセクター(A)はプログラムラインとVTR-1との切替、プログラムセクター(B)はプログラムラインとVTR-1、VTR-2の切替が出来、VTRを選択した時は他の学生と関係なくVTR教材の視聴が出来ます。(2人共同使用)

5. 機器ラック 1式

・U-matic VTR (VO-5600)	1台	} ラックに収納
・U-matic VTR VTR (VP-5000)	1台	
・ $\frac{1}{2}$ ベータVTR (SLO-420)	1台	
・ $\frac{1}{2}$ VHS VTR (NV-8950)	1台	
・モニターテレビ (PVM-9000)	1台	
・モニターセクター (VCS-63)	1台	
・マトリックスAVスイッチャー	1台	
・VTRリモコン本体 (RM-555)	1台	



〈新LL.教室マスターコンソール〉

◎VTR-1~4の番組チェック、頭出しが単独でモニターしながら出来る。

◎AVスイッチャー卓、レクチャーテーブルからVTR-1~3までの全てのリモコンが出来る。

◎送出、プロジェクション、モニター切替がAVスイッチャー卓、レクチャーテーブルから出来る。

6. ビデオプロジェクター 1式
(VPH-722QJ)

◎72インチの大型スクリーンで迫力あるビデオ映像が視聴出来る。

7. レクチャーテーブル 1式

◎暗幕の開、閉、停止が出来る。

◎マスターコンソール、ビデオプロジェクター、モニターテレビ、記録用VTRへの送り出しが自由に出来る。電子式マトリックススイッチャー

一用コントロールパネル内蔵。

◎U-matic VTR×2台、ベータ方式VTR×1台のリモートコントロールが出来る。

◎事前チェック及びプログラム系統のチェックのためのモニターテレビ(9インチ×2台)が内蔵されている。

◎可動式のため授業内容により場所を変えて使用出来る様接続用コネクターボックスも2ヶ所に設置してあります。

8. 教材提示装置 1式

- ・カラーカメラ DXC-M3
- ・電動施回装置 PTH-IIS

以上本設備の概略紹介をいたしました。尚詳細については本学図書館、LL担当までお問合せ下さい。



〈新 L. L. 教室〉

〈出版物案内〉

1984年3月以後に出版された、語学テキスト(スライド、ビデオテープor録音テープ付)、目録、論集等は以下の通りです。これらの出版物は「大学教育方法改善」「視聴覚教材開発」等のプロジェクトによるものです。

- ・ベトナム語重要文法語彙用例集(1) 富田 健次
- ・PORTUGUÊS MODERNO ATRAVÉS DE EXTRATOS DE LIVROS DIDÁTICOS
- ・視聴覚外国語教育研究 第7号
L.L.授業の一環としてのビルマ語書き取りの試み 南田みどり
場面に対する学生のコメントのテキスト分析 乙政 潤

- 発話形成メカニズムにおけるイントネーションの機能について 生田美智子
- インドネシア語の常用色名 松野 明久
- 日常会話と非日常会話 大橋 克洋
- デンマーク語の半強勢についての考察—Fremmedarbejderの場合— 福居 誠二
- フランス語の中立的発話の音調 郡 史郎・大木 充

||||||| 編 集 後 記 |||||

- ◇ AV ジャーナル第6号をお届けします。原稿を早くから預っていたが、遅くなってしまいました。
- ◇ 5階L.L.教室が新設され今年度から使用されます。ビデオを中心とした多用途のL.L.教室です。

- ◇ 表紙の写真は、本学ビルマ語学科客員教授のエーペー氏です。
- ◇ 次号の発行は12月を予定しています。多くの方々の寄稿、ご意見をお寄せ下さい。 (H.K.)

A V Journal 一第6号一

1984年9月26日発行

編 集 大阪外国語大学視聴覚教育委員会
附属図書館視聴覚資料係
発 行 大阪外国語大学
印 刷 榊 ム ラ タ 印 刷